心に刃を持てる者

ホロホロ鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
心に刃を持てる者

【Ｎコード】
Ｎ６５７６Ｎ

【作者名】
ホロホロ鳥

【あらすじ】
俺は死んだ……それも色んな人と一緒に。
悲しくて悔しくて……神に俺の身なら何でもいいから助けてくれと懇願したら本当に神様が現れた。
何でも皆を助ける代わりに俺に力を貸してほしいとか・・・

それに了承した俺は神様にとある世界に転生する

そして俺はかつての世界とは想像もつかない“忍者”の暗躍する世界へと向うのだった

プロローグ（前書き）

どうもホロホロ鳥です

この小説はＮＡＲＵＴＯの世界の二次創作作品です

原作崩壊やオリ主ものですが楽しんでくれれば幸いです

プロローグ

穿ちた体を知るのは己

体に残る痛みにただそれを傍受し、己は動かぬ四肢を茫然と見聞し、
世界はただ赤に染められていた

視界には動かぬ肉塊、心当たりもないそれに呻く声が語りかけている

俺は今どうなっている？

疑問には誰も答えてくれない……世界はどうしようもなく現実的で、
御都合主義の欠片もなかった

俺は今どうなっている？

「アアア……ウアア、オエッ……」

聞こえてくるのは声にならない声

「タスケテ……タスケテ……」

無理だ……俺にはもう何も出来ない

「イタイヨ……イタイヨ……」

無理だ……体に力が入らない……指一本動かせないんだよ

ああ……もしも神様がいるなら助けてくれ……俺はもう無理だ、体が全く動かない……

だから今助かるやつだけでも助けてくれ……俺は別にどうなってもいい……せめて今助かる奴だけでも助けてくれ……頼む！！！

「ふむ……だったら力を貸してやろうかのう……？」

え？

目を開けると

「知らないｔ……って空！？」

一面が空だった

え？　どうゆうこと？　上も下も右も左も全部空なんだけど？

地面もない、太陽もない……なのに今目の前にある空は真っ青で雲がゆっくり流れている

パニックになった俺はあたふたして空中でジタバタしてみる

「ホッホッ……比較的精神に異状は見られないようじゃの」

そんな声が聞こえると目の前に白いフードを纏ったお爺さんが現れる。　誰ですか？

「わしは神様……といってもお前さんの考えている全知全能のなんたらという存在ではないがの」

そういって足物まで伸びた髭を優しくなでつけている。すっげー髭だな

「まあそんな事よりお主の事なんじゃが……」

そういって神様は今の俺の状態を説明してくれた

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ふーん……つまり俺が死んだ瞬間に願った皆を助けてくれって願いを叶える代わりに神様の願いを聞いてほしいということか？」

「そうゆうことじゃな……なに、自らの死を目前にして他人の命を助けてくれなんてゆう奴は珍しくての……ほんのお戯れじゃよ」

「そうか……ま、その気まぐれな心遣いに感謝しないとな……で？あの人たちは助けてくれるのか？」

「まあお主の望みを叶える前にわしの頼みを聞いてくれるか？」

そういった神様の目を見る

その真摯な眼差しに俺は仕方ないとばかりに了承した

「そうか、聞いてくれるか。実はの……」

神様の話はこうだ

神様というのは目の前のお爺さん以外に結構な数が存在し、その中の一人がとある管理された世界に神の法具の一つを気まぐれに放置され、その法具のせいで世界が破壊され、法具が行方不明になってしまった。

そしてやっとその法具の場所が判明したんだが法具がその世界に馴

染んでしまい、迂闊に手を出せない問題になってしまった。
ゆえに俺の頼み事は法具の捕獲、または破壊して体に取り込んで欲しいらしい

「体に取り込むってのは？」

「うむ……お主をその世界に転生させるときに体に特殊な能力を付加させる。そしてその力で法具を体に取り込んだ後にどんな方法でもいいからその生涯を閉じてほしいんじゃよ」

「つまり死ねと？」

「といっても方法は何でもいい。老衰でも病気でもかまわん……要は体に法具を内包しているということが重要なのじゃ」

本当に死に方は何でもいいみたいだな……それならいいかな

「わかった。その条件のもう」

「おう、やってくれるか！？」

神様は嬉しそうな顔をしている

「でも神様自身が干渉できないのか？」

「無理じゃ、最初にいったじゃろ？　わしらは全智全能じゃない、せいぜい管理する世界にお主のような人間を送りこむ程度じゃな」

なんか神様にも気苦労が絶えないみたいだな……

「管理職って大変だな…」

「全くじゃよ…」

こんな神様像は見たくなかったなあ……

誕生……そして転生（前書き）

この作品はＮＡＲＵＴＯの二次創作作品です

誕生……そして転生

「……と、ゆうことでお主を世界に送ることにするかのう」

そういって目の前の神様は指パッチンをすると俺の体が光りだす

な、なんじゃこりゃ！？

「なに、お主がその世界で生きていけるようにわしからの選別じゃよ」

神様がそういった瞬間俺の体はみるみる縮んでいき

……縮んでいき？…って赤ちゃんになっとる！？

「お主を世界に馴染ませる為にはしっかりとその世界の人間からお主が生まれないといけない。　ゆえにこうゆう措置を取らせてもらったぞい。なに、ある程度の年になればお主の人格や記憶、更に能力もわかるからの。楽しみにしておけばよい」

「バーブ、バブバブ、アーアアー（わかった、それならしかたないな）」

赤ちゃんのせいか言葉がよくわからん事になってしまったが神様は

通じたようでまた指パッチンをし、俺の体はまた光りだした

「さて、では頑張るんじゃぞ」

「アーアアー（まかせときな！）」

そして光と共に意識はなくなり、新たなる世界へと俺は旅立つのであった

・
・
・
・
・
・
・
・
・

ホギャア！　ホギャア！！

「ハタキさん生まれましたよ！　元気な男の子だ」

俺は介助にきた明日菜婆さんからの言葉で嫁のひじりのいる部屋に飛び込んだ

そこには布団の中で微笑む妻のひじりともう一人

「すー……すー……」

静かな寝息を立てて俺の息子が眠っていた

ああ、可愛いなあ、こんちくしょう！

「最初は泣いていたけどすぐに大人しくなったね。手間がかからなそうでよかったじゃないか」

そういって明日菜婆さんは俺の背中をバシッと叩いて言った

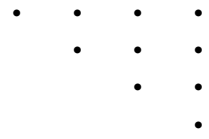
「あなた…」

そして弱弱しく微笑むひじり

「ああ……ヒカリと一緒に大切に育てていこうな」

俺も微笑み返し、いまだこんな喧噪の中で眠る息子と向こうでこちらをチラチラ見に来ている娘を迎えにいく

今、間違いなく俺は幸せの絶頂にいた



木の葉の里……火の国と呼ばれる隠れ里の一つ。忍びの世界では最強と謳われる大国の隠れ里であり、森林に囲まれた場所にある里である

そしてこの里にはアカデミーと呼ばれる忍術養成学校がある。　そこに通う二人の兄弟がいた

東雲　ヒカル　（しののめ　ひかる）
東雲　正影　（しののめ　まさかげ）

ヒカルは正影の４つ上のお姉ちゃんである

しかし正影の方はお姉ちゃんにおんぶをされているのだが……

「ほら、ここがお姉ちゃんの通ってるアカデミーだよ」

「アーアアー」

背中におぶった正影にアカデミーの校舎が見えるようにずらすと手をパンパン叩いている

その姿に満足したのかヒカルは笑顔になるとさっさとアカデミーに入っていくのだった

・・・
・　・
・

「おっはようヒカル！　ん？　その背中におぶってるのは？」

隣にやってきた黒い短髪のショートボブ、そして何故かしている両目を隠す黒い目隠しをした少女、トオメ　センリが声をかけてきた

「おはようセンリ。　この子は正影、私の弟だよ」

「へえ、この子がヒカルの言ってた弟君かあ……何で連れて来たの？」

センリはこっちをポーッと見ている正影のほっぺをツンツンしながらヒカルに聞いた

「今日はお母さんとお父さんが仕事でいないから私が面倒みるって連れてきちゃったの」

「ええ…それまずくない？　紅先生怒るかもよ？」

そういってセンリは両手の人差し指を伸ばして頭の両方にやり、角の生えた鬼のポーズをした

だがヒカルはどこ吹く風

「だーいじょうぶだって！！　何だかんだいって紅先生優しいもん」

ケラケラと笑うヒカル。それを見たセンリはため息をついた

センリはヒカルのこうゆう部分は敵わないな…と思う

生粋の楽天家……というかどんな人に対しても嫌味や欠点を言わず、何か評価できるものがあればどんな人間であれ友達認定をする変り者である

そのせいか目を隠しているどうみても怪しい自分ですら友達と言ってはばからない。それゆえにセンリは彼女を信頼しているのだがいかんせん抜けているところが怖い

二人がそうやって話していると教室のドアが開く音と共に一人の女性が入ってきた

全身を包帯のような衣装に身を包んだその女性の名は夕日紅（ゆうひ　くれない）……現在アカデミーで教鞭をふるう中忍である

彼女は黙って教卓の前まで行くとそのまま周りを見渡した時、ヒカルの所で目がとまった

「ヒカル、あなたその子供は？」

「あ、はい。　実は両親が二人とも仕事で弟の面倒を見る人がいなくて……駄目でしたか？」

「……」

ジッとヒカルを見つめる紅……冷や汗が止まらないヒカルに何故かわからないが一緒に汗をかくセンリ

「・・・・・はあ」

紅は一つため息を苦笑して

「わかったわ……でも、ここで泣いたりしたら問答無用で教室から叩きだすから」

取りあえずの妥協点

「アーアーアー」

それを聞いた時、ヒカルではなくて正影が返事をした
途端に教室の空気が弛緩した

「どうやら貴方より物わかりがいいようねヒカル？」

「うっ……」

その言葉をきっかけに教室の誰もが笑い始めた。

Ｓａｉｄ　ヒカル

授業が始まって二時間……

「すうー……すうー……」

隣の椅子に座らせている弟の正影は授業が始まってから静かに寝始めた

むう……自分で許可を貰った事とはいえ何だかなあ

騒がれるよりいいけどこうやって幸せそうに寝られるのも納得がいかない

ツンツン…ツンツン…

寝ている正影のほっぺをつついてみる

「んあ……あう……」

するとくすぐったそうにして笑っている

んーー！　かっわいいなあ……！

そして

スウ……

あ、おきちゃ……った…え？

正影の目……何これ？　まさか……

そう思った瞬間正影が瞬きをするとまた普通の目に戻った……よかった

今見たのは私の勘違い？……でも見間違いってわけでもなさそうなんだよね…

うーん……難しい事はわかんないやあとあと！　取りあえず私は正影の姉、それがジャスティス！

姉足るもの弟を守らないとね……授業ちゃんと聞かなきゃ！

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

・・・・・

・・・・

・・・

・
・
・

Ｓｉｄｅ　正影

あっぶねー……どうやら姉ちゃん以外は俺の目を見なかったようだな

あ、どうも正影です。どうやら俺の一歳の誕生日を迎え、そのまま転生した記憶が蘇ったみたいだ

取りあえず現状を整理しようか

俺の名前は転生前は田中（たなか）　正一（せいいち）

今は東雲　正影として転生している

現在一歳

母はひじり…父はハタキ…そしてこの目の前の女の子がヒカル……

四人家族だな

そしてこれが重要な事なんだが……この世界の事だ

まず間違いないのがこの世界はあの漫画【ＮＡＲＵＴＯ－ナルト－】の世界だということ

だってあの目の前で教鞭とってんの。間違いなければ紅先生に違いない

どおりであの神様俺に死なないように能力をくれるわけだよ……

ま、取りあえず俺は今一歳だし。手足も上手く動かないから何も出来ないな……精々授業を聞く位か？

そして俺は暇なので授業を聞くことにした

誕生……そして転生（後書き）

ついに主人公転生

そしてお姉ちゃんが主人公の力を一瞬目の辺りにしました

これからどうなるんでしょうか……作者もわからない！

転生・・・そして襲撃（前書き）

連投しろと電波を受けたのでしますね

転生・・・そして襲撃

はてさて、無事に転生した俺ですが現在一歳

結局はその後授業に眠らずに聞いていたんだが中々面白いな。チャクラとか様々な忍術の印の解説など、子供が飽きないように噛み砕いて教えてくれている

意外と紅先生って教えるの上手いんだな……漫画では上忍連中の女性成分担当かと思ってたんだが…しっかりと教師としての能力はあるみたいだ

そんなことを感じながら授業を聞き、終わりのチャイムが鳴った

姉ちゃんのヒカルは俺を「どっこいしょっ」と言いながら俺をおぶる。幸いおんぶ用の布を使ってるので大丈夫そうだが重くないのか？

いや、ここ漫画の世界だった……岩とか地面とか鍛えれば粉砕出来るし、目視出来ないくらい早く動けたりするんだったな……つうことは俺もそんなことの出来る人間になれるのか？……すっげえたのしみ！！

「どうしたー？　なんか面白いあったか正影？」

するとヒカル姉ちゃん（そう呼ぶことにした）が此方に顔を向けてくる

「あーあぁー」

「そうかそうか、お姉ちゃんはお前の言葉がわかんないぞ」

まあ、そうですよね

取りあえず俺は笑っといた。すると姉ちゃんは

「フフッ……」

何が面白かったのかわからないが笑い返してくれた。精神年齢二十歳超えてるんだが所詮一歳、どうしようもない……そして帰宅、俺は姉ちゃんに寝かされることになる

五歳児に寝かされる精神年齢二十歳の1歳児……ホントどうしようもない

よくコ〇ンとか風呂をら〇と入れるわ……いや、実は狙ってやってるのか？……バーローすぎるな

なんか不毛で不生産なこと考えちまった……ここは一歳の赤ちゃんらしく寝ますか

そして俺は意識を落とした……

夜・・・・・・・

「ガアアアアァァァァァァッッッッ！！！！！！！！」

あまりの轟音に俺の意識は覚醒する……何が起きたんだ！？

どうも何か地響きがする……それに人の悲鳴みたいなものも……おいおい…これってもしかして九尾襲来イベントか？

そんなことを思ってるうちに雄たけびが近づいてきた……まさか

ドオオォォォォーーーーーーンンンン！！！！！！

屋根が吹っ飛んだだと！！

「ホギャア！！ホギャア！！」

取りあえずわめく俺……くそ！　もう俺の一生はゲームオーバーなのかよ…まだまだやりたいこともあったし、神様のお願いも叶えてない……せめて法具を体に取り込んでから殺してくれよ！

そんな事を思いながら泣きわめく俺に気づく九尾……やっべえええぇえぇぇぇ！！！

死ぬ！！っと思った時

「ハアァァァ！！！」

一瞬で九尾の目の前に誰かが現れ、何か手のひらの青い球を九尾に叩きつけた

おお！！……あれはまさか木の葉の黄色い閃光か！！

「大丈夫かい？」

そう言って螺旋丸のダメージで少し硬直する九尾の傍から一瞬でやってくる四代目火影……ものすっごいイケメンですね貴方

「ダッ！！」

取りあえず指が動かせないので右手をパーにして四代目に向ける。
四代目は微笑むと俺を抱えて一瞬で安全な所まで送ってくれた……
めっちゃいい人だよこの人

「「「正影！！！」」」

その目的地には俺の父に母に姉ちゃんがいて俺を抱きしめた……その他にも里の人たちが集合している……結構の人が避難しているようだな

すると

「はなせー！！　まだあそこにはとーちゃんとかーちゃんがたたかっているんだよおぉぉぉぉおおお！！」

顔の中心に横一線の傷を負った男の子が泣きわめきながら里の人に止められている

もしやあれはイルカ先生か？

「ひじり……」

「あなた……」

そんな殺伐とした風景を見ていると何やら俺の両親が決心した顔をして四代目の方を向いている。　おいおい…まさか…?

「四代目……いやミナト様…私たちもあなた様と一緒に九尾封印に向かいます」

なっ！　嘘だろ!?

四代目と姉ちゃんは驚愕の顔。そして俺も一歳児らしく泣いて抗議する

「駄目だ!!　お二人にはもう二人の子供が」

「そうだよ!!　お父さん!お母さん!……そんな…居なくなるなんていやだよ!!」

目に一杯の涙を溜める姉ちゃん……だが二人は微笑んで俺と姉ちゃんの頭を交互に撫でると

「ヒカル……俺たちは木の葉の忍だ。それはつまり、里を守るためなら命すら賭けなければならない時がある…それが今だ」

「そう……忍たる私達の使命であり宿命なの」

「でも……でもおぉ……」

とめどない涙を流す姉ちゃん。それに俺も号泣している

「それに俺たちにはお前たち二人がいる……たとえ死のうとも俺の子供を守るためなら本望だ」

「いーえあなた、そこは俺“達”、でしょ？」

そう言いあって俺の両親は笑いあった

なんだよ……なんなんだよ……俺はここでも無力なのか……俺はまだこの二人に何の恩返しもしてないんだぞ？……まだ一年しか親子をしてないけど俺や姉ちゃんに両手からあふれ出るような愛情をくれたんだ……まだ死ぬんじゃねえよ…俺はまだ親孝行のおの字もしてないんだ…納得してんじゃねえよ……まだ生きてんのにまるで死ぬことが確定のように言うんじゃねえよ！！！！

「ホギャアア！！！！　ホギャアア！！！！」

何とか二人を引き留めようと盛大に泣く俺……こんな時に二十歳もへったくれもあるか！！

だけど……二人は俺と姉ちゃんを力一杯抱きしめてこういった

「ヒカル…正影…今はまだわからないかもしれない……だが覚えていてほしい……俺達がたとえいなくなっても……俺達の“火の意思”は
お前たち二人にしっかりと宿っている……だから忘れるな……俺達の愛と…火の意思を」

そして涙で霞む俺の視界、そして両親の目元に光るものがあった…
それは間違いなく涙……だがそれはすぐに二人が四代目のほうを向いて見えなくなった

四代目は悔しそうな顔をしている……唇を強くかみしめて血が出て、しかも手は強く握りしめて白くなっている……そうだ……四代目も苦しいはずだ……それにこれから自分の愛息子に今の里の元凶を封印する作業も待っているのに

息子の為に……たとえ永久に死神の腹の中で悪しき九尾の意思と戦わないといけないとしても

今だ泣く姉ちゃんの腕の中で泣きつかれた俺は四代目と両親の背中を見つめていた……火の意思…そう、俺は確かに二人の両親と四代目火影の背中からそれを悟った

「マーマ……パーパ……」

だから俺は言ってやる……今俺が出来る精一杯の恩返しを

「「「ッッッ！！！！」」」

その言葉に振り返る両親に驚く姉ちゃん……そして

「ダッ！！！！」

両手をパーで両親に向けた……これが俺の今の精一杯だ！！！！！

「……ああ…いってくる！！！！」

「強く……強く生きるのよ。ヒカル、正影！！」

両親の力強い言葉を貰った俺はもう泣きまくったせいか眠気が襲い、
そのまま瞼が上から下に視界の幕を下ろしていったのだった

・・・・・・・・・・

Ｓｉｄｅ　ハタキ

「ダッ！！！！」

息子の精一杯のエール……まるで行って来いとばかりに両手を俺と妻のひじりに向かって見せてきた

それは百…千…いや万に等しい声援のように体を駆け巡った……全く、なんて奴だ……これでは意地でも九尾を何とかしなければならなくなったではないか

「……ああ…いってくる！！！！」

「強く……強く生きるのよ。ヒカル、正影！！」

そして四代目に向く俺と妻……妻の目元には涙の跡がくっきり残っていた

「いいのですか？……ハタキさん、ひじりさん」

四代目の言葉に俺ははっきりと言った

「ええ……それに息子から餞別を貰ったんです……悔いはない……それに……」

俺は妻の肩を抱き

「これでも俺は妻がいればいつもの百倍力が出せるから大丈夫です」

その言葉に頬を赤らめるひじり……はは、こいつめ…いつどんな時でも可愛い奴だ

ここの空気に似つかわしくない空気を醸し出す俺と妻を見て四代目

は苦笑する……そして真剣な顔になり

「ではいきます……お二人の力……借りさせてもらいます！！！」

そして俺達は瞬身の術でその場からいなくなった

九尾襲来の日……偉大な一人の忍……そして数多の英雄が生まれ慰霊碑に刻まれることになった

そこにある一組の夫婦の名前がある……名をこう読む

東雲　ハタキ

東雲　ひじり

と……

転生・・・そして襲撃（後書き）

これを書いてて思いました……主人公の親父がかっこ良くなってしまった……

そしてバランスを取るために超愛妻家に……どうしてこうなった（ーー；）

取りあえず次から原作に突入予定です

そして原作へ・・・（前書き）

俺は！　どっかの！　電波がやむまで！　書くのを！　止めない！

・・・この作品はＮＡＲＵＴＯの二次創作作品です

そして原作へ・・・

あの九尾襲来から１２年……里は平穏と呼べる日々を過ごしていた

俺はあれから１３歳となり、今は下忍として修業を行っている……

ちなみに姉ちゃんのヒカルは“上忍”だ

いいか、大事なので二回言っておく……姉ちゃんは上忍である

姉ちゃんはあの日から血反吐を吐くような修業修業修業の毎日でとんでもなく強くなっていった……だが心はそれに反比例するように冷たく、硬くなってしまったが、それはここ二年で大分改善されつつある……その理由は

「まちなさい正影！」

「待てと言われて待つ馬鹿がいるか！」

まあ俺のせいである

木の葉の町を忍者のように……まあ実際忍者なんだが屋根から屋根へ飛び移っていく

道行く町の人は「ああ……またあの二人か…」みたいな顔をしているが…そんな顔しないで助けてください！！！

「そこ！」

町の人に気を向けていると背中の方から風を切って此方に何かが飛んでくる音…すかさず回転しながら振り向き右手に付けた手甲で弾いた……ってクナイ投げてきたよ我が姉は！！！

「姉ちゃんクナイとか下手したら死ぬから！」

「大人しく捕まらないあんたが悪い！」

ちょ！　ＴＨＥ・理不尽！！！

逃亡も佳境……前を見ると火影様の顔岩の所まで来ている。だが顔岩の様子が変だな？

背中に迫るクナイや手裏剣を器用に避けながら顔岩の近くまで行くと、とんでもない事になっていた

「なんちゅう罰当たりな……」

そんな事を呟いて止まっていた俺。その顔岩の様子を見ていると背中から衝撃が走った

ドンッ！！

「姉ちゃん……飛び込むならもうちょい手加減しような」

実際俺じゃなかったらその場から三メートル滑って止まらずにそのまま吹き飛ぶから

「うるさいわね……あんたが私から逃げるか……ら…」

顔岩の方を向いた姉ちゃんは口をあんぐり開けている。姉ちゃん…口閉じようや

「な、なんて罰当たりな……」

あんたもそう思うかい？　姉ちゃん……

Ｓｉｄｅ　三人称

「火影様！！！」

木の葉の里のとある一角に一室。そこに二人の忍が大慌てでである人物に会いに来ていた

三代目火影……猿飛ヒルゼンその人である

「なんじゃ？またナルトの奴が何かしでかしでもしたか？」

パイプを加え、書を綴っていた老年の忍は背中の火の文字を向けながら、二人の顔を見て問いかける

二人は身振り手振りで

「はい！ナルトの奴、歴代火影様達の顔岩に落書きを！！」

「しかも今度はペンキです！！」

その二人の報告を受けて三代目は「ふーー」とため息をつきながら外に出る準備を始める

外に出る用の外装…火という文字のついた火影の天笠を被り、外に出ていく三代目の背中には哀愁が漂っていた……

Ｓｉｄｅ　正影

「バーーーーカ!!!!!　うっせんだってばよ!!!!」

そういって火影様の顔岩にペンキでいたずら書きをしていた少年は叫んでいる

うわあぁ……バカとかう○こ……そして気のせいかうずまきを多めに書いているのはあいつの名前からきているのだろうか？

そしてギャアギャアいっているあいつと大人たちの所へ目立つ天笠をつけた老人がテクテクと歩いて行く

「おー　おー！　やってくれるのうォ……あのバカ！」

「あー、火影様だ」

ワシの顔にまで……とブツブツ呟くその人こそ三代目火影様である

……おれからするとただの好好爺にしか見えんがね…

と、それをボーっと見てると

「何やってんだ授業中だぞ早く降りてこい！！このバカものーーー！！！！」

ありゃりゃ……イルカ先生の逆鱗に触れちまったか……

やれやれと首を振っている隣で

「全く……これだから九尾のガキは……」

姉ちゃんは若干の殺気を孕ませた呟きをしてその場を後にしていった…

全く……姉ちゃんも困ったもんだねえ。だが俺の事を忘れたようであの少年様久だよほんとに……

修行も終わって顔岩の所に行くと

「きれ～～～～にするまで家には帰さんからな！！」

イルカ先生にそう言われながら火影の顔岩の落書きを消していく少年を俺はボーっと見ている

あーあ……ペンキだから消すのは大変そうだな

まあそれをやった張本人が消しているから可愛そうとは微塵も思わないけど！

「別にいいよ……家に帰ったって誰もいねぇーしよ！！」

そうゆうことをいって不貞腐れたようにその少年……うずまきナルトは落書きを消している

皆に認めて貰いたい……彼はただ寂しさを埋める為だけにこんなバカな行動をする

だがそれは彼が他人からの接触が極端に少ないがゆえ……その行動は俺にはまるで、リストカットをする人間たちと同類に写った

人は人の温もりに飢えている……彼のいたずらはそれを体現する心の叫びなのだろう

だがそれを知る大人はあまりにも少ない……いや知ろうとしないというのが正しいのか？

だからこそイルカ先生は過去、九尾によって亡くなった自分と物心つく前から両親のいないナルトがダブり、こうやって手を焼いているんだろうけどね

「ま、なんだ……それ全部綺麗にしたら…今晩ラーメン奢ってやる」

ピク……ラーメンを奢るだと？

「よーし！オレさ！オレさ！　頑張っちゃお！！！」

「だったら俺も手伝うかな……」

そういって雑巾を握る俺……うーん、二人の顔面白い事になってんな…うけるわｗ

Ｓｉｄｅ　イルカ

「だったら俺も手伝うかな……」

そういってナルトの持ってきていた雑巾を握っているその少年は、一部の木の葉の人間には有名な兄弟の片割れの弟である東雲正影だった

「なんだよ…正影もイルカ先生からラーメン奢ってもうつもりだってばか？」

「当たり前だ！　ラーメン奢るって話が無かったらそのままお前が落書き消すとこ見てるつもりだったからな」

「はあぁ！？おまえさ！おまえさ！ほんっと現金な奴だってばよ！」

「なんだよ照れるじゃねえか」

「ほめてねえってばよ！！」

そういって二人はギャアギャア言いながら落書きを消していく……

本当に正影は変な生徒だった

正影がアカデミーの時に担任をやっていたのは俺なんだが…

授業は真面目に聞かない

実技も真面目にやらない

更によく授業をサボる

だけど何故か成績はギリギリ合格ラインを突破し、卒業試験もギリギリで突破

そして卒業試験の“後の試験”もなんとか突破して今は立派な下忍として活動している

アカデミー時代は本当にナルト程ではないが問題児だったこいつとナルトがギャアギャアやっている所を見てると、本当の中の悪い兄弟のようだ……似てはいないが

まあ、姉の方はナルトを毛嫌いはしているが……逆にそれが東雲兄弟の“異常”さを現わしていた

片や天才と謳われる姉のヒカル……片や凡才と蔑まれる弟の正影

今は大分弟の影響でヒカルは変わってきたが、天才と言われたヒカルは昔、まともな交友関係を作らず

反対に弟は凡才と蔑まれながらその飄々とした性格と、誰にでも関係のない遠慮の無さから色んな人との交友がある

そして何故かこうやってナルトの所にフラリと現れてはちょっかいを掛けていく……まるで通り雨のような少年……それが正影のイメージである

「イルカせんせ〜い……正影なんかにラーメン奢っちゃ駄目だかんな！」

「じゃあお前の落書きだし、お前が俺にラーメン奢れよな」

「絶対拒否するってばよ！！！」

「あ～～～うるさいわバカ二人！！！どっちにも奢ってやるから黙ってさっさと終わらせろ！！！」

「「へ～い、わかった（よ）（ってばよ）」」

全く……中がいいのか悪いのか……

Ｓｉｄｅ　正影

ズルズル……ズルズル……

現在俺は一楽のラーメン屋でラーメンを食べている……ちなみに俺は猫舌の為につけ麺スタイルだ。　うん、旨い！！

そしてラーメンをズルズル食っていると

「んでよ！　先代のどの火影をも超えてやるんだ！！」

ピッと箸をイルカ先生に向けて、ナルトはなんかかっこいい事を言っていた

ああ、チャーシューうめえなあ……

そんな光景を横目で見ながらまたズルズル食っていると

「ケチーーーーー！！！」

なんかナルトがブーブー言っていた。　どうやら額当てを付けさしてくれと催促しているようだな

イルカ先生拒否してるし…ざまあｗ

と、ニヤニヤして見ていたら

「じゃあさ、正影！！額当て付けさしてくれってばよ！！！」

今度は俺かよ…

「一楽ラーメン百杯奢るのと交換なら一日貸してやるよ」

「正影の方が酷いってばよ!!」

「なんだと？　人の善意をそうゆうか！」

「ラーメン要求してる時点で善意じゃないってばよ!!……お前に言わなきゃよかったってばよ……」

「あっそうかい」

「全く……嫌な奴だってばよ」

そうブツブツいってラーメンに注意を向けるナルト……全くバカだねぇ…俺がタダで貸すわけないだろうが

「ま・さ・か・げぇぇぇぇ……」

「ん？」

イルカ先生……どうしてそんな怖い顔してんの？

「お前は忍者の証をラーメンで交換しようとするなあぁぁぁぁ!!

！！」

「だから交換してないんだからいいじゃんか……大将、麺だけおかわりね」

「人の話をきけえぇぇぇ！！！！！」

その後、俺は忍者についてイルカ先生にこってりと説明されてしまった……そしてそのせいでラーメンは俺だけ奢られず、ナルトはニヤニヤして……俺は涙目になって帰ったのだった

そして原作へ・・・（後書き）

はい、原作の最初の方ですね

話が全然進まない事に軽くへこんでます

漫画って文章にすると描写する所が多くて半端ないよ（泣）

暴かれた秘密……そして見つかりし法具……そして戦闘へ（前書き）

文章読み返して思った……ナルトが「～ってばよ」使い過ぎだなｗｗ

今度から自重します

この作品はＮＡＲＵＴＯの二次創作作品です

暴かれた秘密……そして見つかりし法具……そして戦闘へ

……現在は夜…俺は今ナルトの捜索に当たっていた

理由は簡単だ……ナルトのバカたれが火影様の家に安置された禁書の巻物を持ち逃げしたのだ

そう……ミズキの【ナルトのパクッた禁書の巻物を俺が奪う…ナルトざまぁｗｗｗｗ】事件が始まったのである

ちなみにその報を聞いた姉ちゃんが広域探査用の口寄せを使おうとしたので、睡眠効果のある煙玉をわざと部屋で誤爆させて眠らした……

イルカ先生より早く見つかるのは勘弁願いたいからな。ご退場だご退場!!

それに気になる話もある……

『ナルトは禁書の巻物以外にも古い特殊な刀を盗んだらしい』

という話である

刀?……原作では巻物以外盗んではおらず、刀なんて描写はなかった筈だ……

そしてそれこそが神様の探していた法具だと理解したのはナルト探

索が始まってから一時間が経とうとしていた頃だった。

途中三代目の所に赴き、話を聞いたのだが、なんでもその刀は初代火影の更に古の時代……たった一人の忍しか使えなかったといわれる忍具らしい、そしてその刀の情報が書いてある文献によると

その刀は全にして一、一にして全を統べる物なり

その刀はあらゆる名を冠し、その数は数百とも数千ともいわれる

その刀の始まりは始解と読み、終わりを卍解と読む

うん……これでわかる人もいると思うんだが……斬魄刀なんだ……

つまりどっかの神様が崩壊させた世界はＢＬＥＡＣＨの世界で、そしてそのＢＬＥＡＣＨの世界の影響を受けてそんな法具に変異したようなのだ

幸い今の所は使える人間がいない為に問題はないが。もし、使える人間が現れたらえらいことになってる筈……取りあえず三代目からの情報は手に入れた俺は直ぐにナルト探索を始める……それが文頭の俺の状態であった

結構くまなく探しているんだがナルトは今だ見つからない……イルカ先生だからこそナルトの行動パターンを読んで見つけられたんだな

そしてさらに森の奥を捜索していると

「本当・・・教え・・・・る」

ん?今のはミズキの声か?

俺は気配を消して声のする方に向かうのだった

Ｓｉｄｅ　ナルト

「本当の事を教えてやるよ!」

そういってミズキ先生は俺にあることを話し始めた

強くなる方法の書いた巻物を教えてくれたミズキ先生……でもなんで隠れて修業してた俺を見つけたイルカ先生に攻撃したんだってばよ!!

「１２年前…バケ狐を封印した事件を知っているな?」

「?」

おれは俺が生まれた年に起きた事件だ……

「あの事件以来……里では徹底したある掟が作られた」

「…ある掟？」

そんな掟あったっけ？

「しかし…ナルト！　お前にだけは決して知らされることのない掟だ」

は！？

「…オレだけ…！？……何なんだその掟ってばよ！？どうして…」

「クククククククク……」

ミズキ先生が笑っている……なんだ？　すっげえ嫌な感じがする…

「どんな……」

知りたい……

「どんな掟なんだよ？」

俺にだけ隠されたその秘密を……

「ナルトの正体がバケ狐だと口にしない掟だ」

・・・・・・

・・・・・・

・・・・・・

・・・・・・

Ｓｉｄｅ　正影

やりやがったミズキの奴…ナルトの中に九尾がいることをバラしやがった

幸いにも三人に俺は気づいておらず、会話のほうはバッチリ聞いている

ついでに三代目からの監視にも引っかからないようにしているんだが……あれどんな風に捕捉するのかわかんないから警戒の仕方がわかんねえ…

三代目に会ったときに割っときゃよかったと今さらに後悔する

そして三人の会話とシーンは進み

・イルカがナルトを庇って負傷

・ナルト逃亡

・ミズキ、イルカに捨て台詞をはきナルト追跡

・イルカ、負傷しながら二人を追いかける

という塩梅になっていた

もっと詳しい描写とかねえの？　とか思ったらコミックスを買え！

……というメタな電波を受けつつ俺は三人の追跡を始める

ナルトの身なりを見ていた時に背中に何か似つかわしくない刀をぶら下げていたから恐らくあれが法具なんだろうな……まずはナルトを探さないと……

ミズキはイルカをナルトと勘違いしていたようだが俺はそんなヘマはしない……しっかりとナルトの臭いを識別して追いかけていく。

姉ちゃんとの鬼ごっこで培われた逃走能力と追跡能力なめんなよ？

しばらく臭いを頼りに探していると……お、見つけた！　ナルトにイルカ…それにミズキだな

イルカとミズキの会話をナルトが盗み聞きしている……するとナルトが号泣を始める……

イルカ先生……あんた教師の鏡だよ……

だけど誰からも認めて貰えないって所で「まあ一人変な奴には絡まれているが……」って俺の事か？　俺の事なのか？

だけどナルトの泣き顔を見てると此方も来るものがあるな……俺貰い泣きしやすいんだよ

そしてミズキがイルカに攻撃しようとした瞬間……

ドガッ！！！

ナルト乱入！！！

「イルカ先生に手ぇだすな……殺すぞ！！！」

おうおうそうだ！　ナルトやっちまえ！　俺が許す！

そしてミズキの挑発タイム発動……こいつの挑発うすっぺらいなぁーおい

そして今週の山場……ナルトの千人影分身発動！！！

すっげーーーーーー！！！！！

数えてみたけどホントに千人いやがる……大した奴だよ本当に……

そしてナルトのボコボコタイム……いやーリアルでみると本当にすごいね

千人影分身の時なんかあまりの人数に俺が隠れている木の所まで来たから隠れる場所変えなきゃいけない事態になったし……危うくバレるところだったよ

何はともあれミズキはボコボコにされた……さて…ここからは俺の時間かな？

ナルトの影分身の“印”も見たし、チャクラの練り方も“視た”…

…原作の話はここまで…ここからは番外編だよ……

Ｓｉｄｅ　三人称

「さて……帰るかナルト！」

「おう！」

イルカとナルト……しっかりと強く、二人の絆が繋がった時

「残念だな……お前たちもあと数年修業すれば私より強くなれたものを……」

その言葉を最後に無慈悲に、殺気の籠らない黒刃がナルトとイルカに襲いかかる

だが…

「甘いよ」

「むっ……何奴…」

気配のなかった男すら現れるまでわからなかったそいつは現れた

スキンヘッドの頭に漆黒の目、首に巻かれた額当てが木の葉の物とわかるがその雰囲気は何か背筋にうら寒いものを感じる

危険だ……男はすぐさまそう判断した

「いいかイルカ先生とナルト……俺がこいつを引き付ける、だから二人は早く里に戻って応援を頼む！……それと」

そのスキンヘッドの男……正影はナルトの背中にあった刀、斬魄刀

を奪いとる

「あ！　何すんだってばよ！！」

「いや、何となくこいつが俺を呼んでるような気がしてな」

正影がそう言った瞬間

ガキン！！

正影の目の前の男がいきなり斬りかかって来たが正影は斬魄刀で受け止める

「御挨拶だな…」

ボンッ！！！

正影の言葉の後に何時の間にか足元に置いていた煙玉が爆発、視界を白く濁らす……男はイルカとナルトを追おうとしたが目の前の人間の殺気で迂闊に隙を見せることが出来ない

（やはり出来る）

男はまず二人を追うよりも今刃を交えている男を殺すことが先決だと理解し煙が晴れるまで二人はそのまま硬直し、そして晴れた瞬間

キンキーン！！！

斬り合いを始めたのだった

暴かれた秘密……そして見つかりし法具……そして戦闘へ（後書き）

ここから原作から少し離れたオリジナルの話になります・・・すぐに戻りますがね

ちなみに法具は間違いなく死神さんの持つあの刀です

まあこの法具が主人公のＮＡＲＵＴＯにおける尾獣にあたります…

性能は隔絶としてますがね…

戦闘……解放……そして封印へ（前書き）

戦闘描写難しい……

この作品はＮＡＲＵＴＯの二次創作作品です

戦闘……解放……そして封印へ

ズザザザザーーーーー・・・・・・・・タンッ!!

地面を滑り砂埃を上げながらそこから飛び上がる。そして飛び上がる地点に刺さるクナイ

ちっ…避けやがった

「ほう……中忍にしては出来るな」

「残念だが俺は下忍でねっ!……っと!」

迫る三つの手裏剣を斬魄刀で弾きお返しとばかりにクナイを投げつける。相手は黒いコートの両方の袖から覗く二振りの黒刀で全て弾いた

ヤバいな……強い奴が来るとは思ってたがまさか上忍クラスが来るとは…やれないこともないが俺は下忍だし、下手に“本気”を出すわけにもいかないし……っとあぶね!!……艶消しした千本なんて投げてきやがった!

「このやろ!!」

俺は両手で印を組み、術を使う……風遁・真空波！

ビョオォォォ！！！！

口から吐き出される一陣の風の刃が空中にいたコート野郎に向かって飛んでいくが、奴は空中で何かを引っ張る動作をしてそのまま空中で体がスライドする……殆ど目視出来ないほど細いチャクラの糸を傍の気に括りつけて何もない空中で移動しやがったみたいだ。
なんて奴だよ！

奴は飛んでった方の木に向かい、そのままチャクラを足に纏わせ吸着し、その木に水平に立ちながら艶消しの千本をコートの袖からありったけ投げてくる。

俺は斬魄刀で弾けるやつだけ弾いて木の陰に隠れた

スココココココココココココ！！！！！

背中の木に滅茶苦茶に何かが刺さる音がするがそんな物は思考から追いやり、手持ちの煙玉を五つ炸裂させる。このままやりあったら俺がジリ貧だからな……時間を稼ぐために俺は煙玉で真っ白だが構わずに奴の居る所に突っ込んで斬魄刀を振るった

ガキーン！！！

「！！！……よく私の場所がわかったな」

斬魄刀と黒刃で刃を噛みあわせた俺とコート野郎、そのまま煙の中で斬魄刀と黒刃で斬り合い始める

上から下、下から横……俺は両手で振るう斬魄刀と時々蹴りを交えながら攻め、対してコート野郎は黒刃で二刀流の為かそのまま手数で捌いていく

やばい……今は俺が攻めれているが剣の技量は向こうが遥かに高いレベルにいる……このまま煙玉の効果が無くなれば向こうも反撃してくるぞ

そんな風に焦っていても結局は自体は好転せず、煙玉が晴れるとコート野郎の反撃が始まった

右の黒刃の打ち下ろしを斬魄刀で受け止めると、左の黒刃の横薙ぎが腹を裂こうと襲いかかる。それをバックステップで避けるが少しでも距離を開けると袖をふって艶消し千本が飛んでくる

こっちが1の行動をする時に向こうは3の行動をしてくるとかマジ無理……何とか致命傷は避けられているが既にボロボロの俺…この均衡が何時破られるかわからない……っち…視界まで霞んできやがった…血を流しすぎたか？

「そろそろ終局のようだな」

「さあ……それはどうかね？」

余裕な感じでいってやったがもう一杯一杯です……早くだれか助けに来てください！！

すると

ドクン！！

俺の願いが聞いたのか斬魄刀が脈動を始めた

『フォッフォッフォ……どうやら法具を手に入れたようじゃな』

な!?　その声は神様か!?

『いかにも……しっかり役目を果たしてくれたお礼にお主に新たなる力をやろう』

まじか!　今殺されそうなんだ……頼む!!

『うむ……しかと受け取れ!』

そしてもう一度斬魄刀が脈動した時

ドクン!!!!!!

き、きた!……わかるぞ……こいつの能力……

「いくぜ……理(ことわり)を統べるその力……全は一、一は全……全ての力はここに集まり……集まりしそれは世界となる……目覚めろ……我が元に顕現せよ!!!!　八百万(やおよろず)!!!!」

この言葉を叫んだ瞬間……俺は眩いばかりの閃光に包まれた

Ｓｉｄｅ　三代目火影

わしは今、ナルトとイルカを救った正影が相手の忍者と戦っている所を遠見の水晶の前で観察していた

いかにわしとて火影という立場から迂闊に出れない為に見ていたんじゃが……結局はナルトを見つけた後、事の顛末を見守っていたんじゃが、まさかナルトがあれほどたくましくなっておったとは……全く、子は親に似るという事なのかの？しかしそれも以外じゃったがこの途中からナルト達を助けた正影の実力も以外じゃった……

相手は恐らく上忍レベル……しかも暗殺専門の人間にこうも喰らいつけるとは……既に実力なら中忍と差し支えないレベルじゃ

だがわしはまだまだ正影の実力を見誤っていたようじゃった……ふいに正影が相手から距離をとった時

「いくぜ……理（ことわり）を統べるその力……全は一、一は全……全ての力はここに集まり……集まりしそれは世界となる……目覚めろ

神達よ……閉じた世界から顕現せよ！！！　八百万（やおよろず）！！！」

正影がその言葉を叫んだ瞬間、一面が真っ白い閃光に包まれたのじゃ……そしてその光の中、水晶は“それ”をしっかりと捉えておった

刃……それも幾千、幾万の様々な刃が無秩序に、全くの脈絡なく相手に襲いかかり、塵芥に変わる…

なんという光景じゃ・・・・・・まさか、あの刀にあんな力があるとは……やはりあの姉ゆえにこの弟も非凡なる才能を持っていたということか

じゃが幸いにもそれを見たのはわしのみ……正影の力は隠しておいた方がよさそうじゃな……

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

・・・・・・・・・・

取りあえず

「知らない天井だ」

いや、ここが木の葉の病院って知ってんだけどね……ノリだよノリ

辺りを見回すとここは個室の病室みたいだな……そしてあの壁に立てかけてあんのは斬魄刀か？……三代目…なんで没収しなかったんだろ？

ガラガラ

「おお、起きたようじゃの正影」

噂をすれば影。病室には三代目が入って来ました

取りあえず俺は助けてくれたお礼と事の顛末を三代目に教えて貰った

……ふーん……俺が刀の力を解放した後、コート野郎はそのまま大量の刃に晒されて塵になったか……まあ俺は死ななかったし結果オーライだな

「それで、なんであそこにあの刀があるんですかね？」

「ん？……ああ、実はそのことなんじゃがな…」

そして三代目は気まずそうに説明してくれた

どうやらあの刀、俺と一定の距離を置くと勝手に俺の直ぐ傍まで瞬間移動移動するらしく没収出来なかったそうなのだ……これは嫌でも離さないつもりだな神様……

「じゃからの……里の上役はお主にその刀を譲ることが決定した」

「え？　でもこの刀木の葉建国前から存在している貴重な物なんじゃ？」

「道具は使えてこそ道具じゃ。どうせ蔵の肥やしになっていた古い刀よ……使える者、しかも木の葉の忍ということで上役のほうも渋る気配は見せなかったぞい」

まあ、確かにこの斬魄刀は歴史的価値はあるがこの世界では武器は使えてなんぼ。それにこの刀、見た目は装飾的価値もない武骨な作りだからな……そこらの刀と価値は大差ないとみて了承してくれたようだ

だが三代目は俺との戦いは見ていたはず……あの力の事は言わなかったのかな?

「三代目……この刀の力の事は上役には?」

「うむ、言おうと思ったんじゃがいかんせんお主しか使えんし、ワシしか知らんからな……黙っといた」

そういって三代目はニヤリと笑い

「ナルトとイルカ……二人の命を救ってくれたお礼じゃわい」

そういって笑う三代目の顔を見るとフツフツと罪悪感を感じてしまう俺……いくら助かるとはいえイルカ先生の怪我とかも防げたはずなのに・・・・・なんだか自分が酷い人間のように感じてしまった

しかし原作通りいかないと不味いことになりそうな気がして俺は踏みとどまった・・・・・カオス理論を信じているわけじゃないが原作崩壊が何かとんでもないものを招きそうで怖いんだよ

実際にあの上忍なんて原作にはいなかったし……俺以外の気配が気を配っていてよかったよ

取りあえず三代目にお礼をして、俺は残っている問題に取り掛かったベットから降りた俺は斬魄刀のとこに行き、刀を持ってベットに戻る

「どうしたんじゃ？」

不審がる三代目

「三代目……これは秘密にしてくださいね……封印！」

その言葉を叫ぶと斬魄刀は輝いて黒い水晶になり、俺はそれを“そのまま飲み込んだ”」

「なっ！」

びっくりする三代目をよそに黒い水晶は飲み込んで喉まで来るとス

ウッと消え、体に何か宿るのを感じる

「あの力を得た時知ったんです……この刀の力をコントロールするには体内に封印するのが最も適していると」

俺の説明に三代目は直ぐに納得した。確かにあんな無秩序に刃があふれ出る力がコントロールされた力じゃないとわかったんだろう…
…実際に俺も気絶しているしな

その後、三代目と簡単にこれからの事を話していると

バアァァァン！！！！！！

「正影！！！！あんた私を眠らせて置いて行った覚悟は出来てるんでしょうねえ？」

般若とエンカウントしました・・・・・・ってちょ！・・・ねえちゃん

「ほっほ、わしはそろそろお暇するかのう」

三代目！！　そんな目線そらしてそそくさと逃げないでよ！！！

「姉ちゃん！！　俺今怪我してんの！！　入院してるの、わかるよね？」

なんとか突破口を見つけようと言い訳をしてみるが

「いいわけは……」

般若は

「無用だぁぁぁぁあああああ！！！！！！！」

聞く耳を持っていなかった

「ギャァァアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！」

その日、正影を見舞いに来たナルトとイルカは、正影の入院している部屋で赤いチャクラを纏った般若とベットに置かれた肉塊を見て

しま

い、それが木の葉病院七不思議【病室の般若】として語り継がれることになったのであった……

戦闘……解放……そして封印へ（後書き）

ついに斬魄刀の名前と力が出てきましたねえ……

名前から解ると思いますがマジで能力はチートです

そしてこれから主人公自身の能力も斬魄刀の力でどんどん強くなっていく模様です（最終的に刀使わずに全尾獣まとめてボコボコに出来るくらい）

しかし今の状態ではまだ姉に勝てませんがね

キャラ設定（前書き）

滅茶苦茶短いです

簡単なオリキャラの紹介です

ご了承ください

キャラ設定

東雲（しののめ）　正影（まさかげ）

本作品の主人公

転生前の名前は田中　正一……転生前、悲惨な事故で命を失いかけた時にまず自分の命よりも他人の命を救ってくれと願ったせいでたまたま神に選ばれた男

中々のアニメ・漫画オタクだが元々は仏門に入ったお坊さん

ゆえに転生後も頭を剃り上げ、特殊な薬で髪の毛が生えないようにしている

髪があるときはやや外はねした漆黒の髪と切れ長の目も相まってとてもモテそうなのだが、今はハゲ頭のせいで全くモテない

本人はいわく「髪の毛は邪魔……必要な時はカツラでも被ればいい」と思っている

姉にはしつこく髪を伸ばせと言われているが伸ばす気は皆無である

基本は忍具で撹乱し、体術と忍術で攻め、他にも体内に封印した法具【斬魄刀】を武器として扱う

性格はさっぱりとしていて人をからかうのが好き。自分が気に入った人間ならあまり境遇とか気にしないタイプである

姉ちゃんを大切にしており、たとえ姉ちゃんの為なら自分が死ねる覚悟がある

東雲　ヒカル

正影の姉で正影から４つ年上。かつて両親が死んだときに自分の弱さを悔いて血反吐を吐くような鍛錬の末、上忍になった

子供の頃は楽天家だったが九尾の襲来ののち、性格が豹変……冷たい印象を与えるようになってしまった。しかし最近は正影のせいで少々治ってきている

あまり表面に出さないが重度のブラコン…自分は認めてないが周りからはバレバレ

九尾を封印されているナルトを親の仇と思っており、物凄く毛嫌いしている。そして弟が何かとナルトにちょっかいを掛けているのがおもしろくない（これもブラコンのせい？）

トオノ　センリとは今も自他共に認める親友である

トオノ　センリ

ヒカルの親友

黒髪のショートボブに常に黒い目隠しをしているが理由は不明……
しかし目隠しをしていても全く支障がないあたり何か秘密がありそうだ

だいたいヒカルを諌めたり正影に自重を促したりする常識人……だがわりと東雲兄弟のトラブルに巻き込まれる

若干のツッコミスキルがある

東雲ハタキ・・・主人公の親父で愛妻家

東雲ひじり・・・主人公の母親でお父さん大好き

神様・・・いい爺さん

キャラ設定（後書き）

うっ・・・最後がいい加減すぎる・・・

まあキャラ設定は最初はこんなもんです

次回は大体ナルトがカカシ班に入った後ぐらいの話になると思います

特訓・・・そして接触（前書き）

このお話は時系列的に波の国編の前です

この作品はＮＡＲＵＴＯの二次創作作品です

特訓・・・そして接触

木の葉の里の中……主にサバイバル演習などで使われるその区域、
そこに

「「オオオォォォォーーーーーーー！！！！！！」」

二人の男が戦っていた

片方は木の葉の美しき碧い野獣……その名はロック・リー

「はあぁぁぁぁ！！！」

木の葉・烈風！

リーは豪速で繰り出された拳を払ってそのままその場で独楽のように横回転、そのまま地面を滑るような右足の低空回し蹴りが相手の足に迫る

しかし相手の男……東雲正影は拳が払われるとすぐさま飛んで前宙気味に飛び、縦に回転

木の葉・豪車輪！

そして縦回転で生まれた円運動を利用し左足の踵落としを木の葉・烈風をしてしゃがんだリーにお見舞いし、
リーはこれにすぐさま反応……両腕を頭の上でクロスし、踵落としを受け止める

ドグゥッ！！！

「ぐうぅぅ…」

骨まで響く一撃に顔をしかめるリーだが、そのまま足の力だけで下から上に飛び上がるような足蹴りを繰り出す

「はあぁぁ！」

木の葉・昇風！

バシィッ！！

「あぶねえ！！」

正影は放たれた下からの蹴りを体を後ろに反らし、さらに両腕で威力を殺しながら捌いて着地する

「やりますね、正影さん」

同じように着地したリーは重心を落とし、相手から見て半身になりながら左手を腰の後ろに、右手を相手に突き出す独特の構えをして笑う

対して正影やや半身にして右足と右手を前にした前傾姿勢。そして左手はリラックスするようにダランと力を抜いてプラプラしている……別に怪我しているわけじゃない……これが彼の戦闘の構えだが…何故かもう疲れた顔をしている

「はあ……俺はお前と組み手する度にいつ首が吹き飛ぶかビクビクだけどな」

気苦労だろうか？……構えから窺える隙の無さとは対照的に、聞こえてくる声は覇気の感じない力の抜けた口調だった

リーはそれにクスリと笑う……だが声に対して油断はしない…今この瞬間ですら正影が隙を狙っているのがわかってるからだ

そしてお互いが黙る数秒の静寂の後……

タンッ！

シャッ！

リーは真っ直ぐ飛びかかり、正影は地を滑るように距離を詰め、そして攻撃可能距離に入った瞬間にまずリーが仕掛けた

リーの空中からの真っ直ぐ伸びた右足の蹴り…正影はそれを前に出した右手の裏拳で踵にぶち当ていなし、進行方向のベクトルをずらして体制を崩し、そのまま正影は右足に力を込めて地を蹴り飛び上がり、体制のずれたリーの右腰を狙って左の飛び膝蹴りを放つ

だがリーは危険を察知して崩れた体制のまま両の掌で膝蹴りを受け止め、その力に自分の両腕の力を加算して更に上に飛ぶと正影に向かって空中で三段蹴り叩き込んだ

ドカッ！　ドカッ！　パシイィ！

正影は一段目と二段目を捌くが、三段目はそのまま受け止め

「あらよっと」

掴んで投げた

「うわっ……と！！！」

何とか着地するリーだが直ぐ目の前に正影が迫り、蹴りと拳の連続攻撃をすると気を引き締めて更に体のギアを上げる

リーの体術は蹴りを主体とし、そのスピードに加算される蹴りの威力で敵を蹂躙することを旨とし、その戦い方は突き詰めればある“術”を己が最大活用するために考案された戦闘スタイル……その攻撃力も相まって奇襲や強襲、または殲滅戦等の速攻戦に特化している

対して正影の体術は敵の攻撃の機先を封じ、カウンターや奇抜な戦法で相手を制圧することを旨とし、その戦い方は忍具や忍法で撹乱、隙をついて止めをさす戦闘スタイルでなのでリーと同じで奇襲に向くが、こちらは持久戦や撤退戦や消耗戦、更に迎撃に高い能力を持ち、此方はとにかく戦闘生還力に特化していた

そして今は純粋な体術だけの戦闘なので忍具や忍術の使えない正影はリーがギアを上げてしまうと

ガッ！　ガガッ！　バシバシバシバシ！！！

「ちょっ！無理無理無理無理！！！」

攻めから一転、防戦一方に回ってしまうのだった

そして戦闘開始から３０分……

ガッ！　ガガッ！　ボグゥ！！

「グッハアァァ！！！」

「あ」

体力の尽きた正影の腹にモロにリーの蹴りが入ってしまい、そのまま正影は吹き飛んで負けたのだった……

・
・
・
・
・
・
・

Ｓｉｄｅ　正影

ううう……腹が……朝食った納豆ご飯が出てきそうだ

「しかし驚きました…いつの間にこんなに体術が出来るようになったんですか？」

リーはなんか目をキラキラして聞いてきた

「ああ、俺の小隊っていつも三人小隊（スリーマンセル）で俺、センリさん、姉ちゃんで任務やってんだけどさ…センリさんが偵察と敵の分析と把握、姉ちゃんは基本任務の時に指示と殲滅、んで俺がその後の撤退時の撹乱と時間稼ぎをするからな……いかんせん戦いに勝つよりも生き残る技術に磨きがかかっちまう……体術はそれの副産物だよ」

遠い目であの地獄をうっすらと思い出す……うええ……

「な、なんか苦労してるんですね……僕も正影君に負けないようにガイ先生の元で鍛錬に磨きをかけないと」

「鍛錬に磨きって……確かに忍者としては一流だがあんな全身タイツの変態と修業なんて俺はもうごめんだ」

「なっ！　正影くん！　あなたも一時期ガイ先生の師事をしていた筈です!!……それに君もあのスーツをｔ「いうなあぁぁ!!」」

そう……俺も体術の勉強の為にガイ先生（ゲキマユ）に修業をつけてもらった事があるんだが……修業を見る条件が“あの全身タイツをつけて行う”という罰ゲームじみた条件だったんだ……

「確かにあの時は色々教えてもらったし尊敬はしてるが……あのスーツがなあ…」

「全く……そういえばあの正影君が修業中に着ていたスーツ……どうしました？」

「ああ、タンスの中に閉まってるよ……なんか捨てるに捨てれなくてな」

何か捨てると呪われそうじゃん？

「捨てる!?……あのスーツを捨てようとするなんて……これは一度ガイ先生に正影君は熱血指導をしてもらった方がいいですね」

ああ、何かリーの目が燃えている

「まあ、いいけどな」

「本当ですか!?」

笑顔になるリー……だが

「ただしあのスーツは絶対着ない」

「なっ!それでは意味が無いでしょう!」

「修業の身なりに意味もくそもあるか」

俺は持ってきていたタオルで汗と頭をゴシゴシとふいて立ち上がる

「あっ!　まだ話は終わってません!」

「俺は終わった……太陽拳!」

「うわっ！　眩し！」

あいにく時間は正午……こんな天気のいい日に予め磨いた我が頭のテカリを防ぐ術などない！

俺は頭にタオルを巻いてそそくさとリーから逃げたのだった

「待ってください正影君！」

「イヤダ、オレ、ニゲル」

「何故にカタコトなんですか！？」

ふう……今日も平和だ

特訓・・・そして接触（後書き）

うん……反省はしている…でも後悔はしない

前回コート野郎と戦った時に使った足技は実はガイから教わったものだという事でした

しかし基本はこの章の様な戦い方を主軸にします

ううん……斬魄刀の剣術を誰に教えて貰うかなあ……

取りあえず候補は月光ハヤテだったりします

誰か他に候補いないっすかね？

波の国に行く前日のひと時（前書き）

キャラの性格が崩壊してないかビクビクして投稿しています

この作品はＮＡＲＵＴＯの二次創作作品です

波の国に行く前日のひと時

あー……暑い……お日様がムカつく位爛々と光を放ってやがる……
あっちーーー……

ユラーリ……ユラーリ……

ピカッ！……ピカッ！……

ん？　何だ？　目で捉える人がフラフラしている俺を見ると条件反射の如く目を背けやがる……もしかして……

今日食べた海苔巻きの海苔が歯についてたのでも見られたか？

所々「まぶしっ！」…とか「人間ミラーボールか！」…とか聞こえるが暑くて何が眩しいんだかわかんね……なんか冷たいものを～～～……またはかき氷を…

バサッ……

ん？

「ったく眩しいんだよあんた……どうゆう作りしてんだその頭？」

頭にかかる布っぽい物……そしてこの声は

「シカマルか？」

振り返るとめんどくさそうにこちらを見ているちょんまげ少年が此方に向いて溜息をついていた

・・・・・

・・・・・
・・・・・
・・・・・

Ｓｉｄｅ　シカマル

めんどくせぇ……父ちゃんのパシリなんて受けるんじゃなかったぜ……今日は一日中雲を見て過ごそうと思ってたのに…小遣いにつられて安受けあいしたのが失敗だった

しかも今日はやけにあちーし……何か冷たいものでも飲んで……そんなことを考えてると

チカチカッ！！！

うお……なんだかやけに向こうで何か光ってやがる……もしかして奴か？……オレはその場に急ぐと

ユラーリ……ユラーリ……

ピカッ！……ピカッ！……

頭を右へ左へ、そしてそれのリズムに合わせて頭が閃光玉のように光っている……わかりやすいなおい

バサッ……

「ったく眩しいんだよあんた……どうゆう作りしてんだその頭？」

そのハゲ頭に持ってきた手拭いを被せる。するとそいつはクルリと頭を此方に向けて驚いたように

「シカマルか？」

と呟いた……何だよ？　珍しいもんでも見たみたいな顔しやがって……ついでに顔をペチペチ叩くな

「ああ……父ちゃんが呼んでるから呼びにきたんだよ」

「なんだシカマル、シカクさんのパシリか？…大方小遣いでも貰う約束したんだろ？」

っち…なんでこうゆう事には目聡く気づくんだよ……

「まあいいか……シカクさんの所にいくかな…ちょうど向こうにアイスキャンディー売ってるし、お前のも買ってやるから来い、シカマル」

そういって正影は頭の手拭いをバンダナみたいに頭に被り直すとさっさとアイスキャンディー屋に向かっていった…俺の意見は無しかよ…

…たくっめんどくせぇ……

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

・・・

正影は他人の家などなんのその……座っていた縁側の横でダラーンと寝ころんだ

「お前人の家で寛ぎすぎだろ」

「アホ、こんな縁側寛がずしてなんとなる」

シカマルのツッコミにキリっとした顔で答える正影……その顔にシカマルは「めんどくせぇ」と言ってどっかに行ってしまった

「ありゃ、怒ったのか？」

「赤の他人が自分の家でそんなことしてたら大概怒るもんさ」

シカクはそういって苦笑いして正影の隣に座る。そして正影もシカクの雰囲気に。なにか真剣な話だと察知して居住まいを正した

「お前さんなら知ってると思うが、あと数カ月で“アレ”が始まる」

その一言に正影はしばし考えた後、その答えに行きついた

「中忍選抜試験……もうそんな時期になったんですね」

正影は何か遠い目をしている

「お前さん、去年受けたはずなのに忘れてたのか？」

「ええ……まあ」

それだけ言う……何故か正影は急に老けこんだ

「姉ちゃんとセンリさんは下忍じゃなかったし……去年は“あれ”だったし……すっかり忘れていました」

正影の周りの温度が下がっていく……

（こりゃ。地雷ふんだかな…？）

シカクはしまったという顔をした

中忍選抜試験とは三人小隊（スリーマンセル）を基本とし、試験中に試験の突破、そして最終試験の舞台で既定の能力を見せた者が中忍になれる試験である

この試験は忍者の試験らしく忍者に求められる隠密能力や戦闘能力……更に小隊を纏める指揮能力等のリーダーシップが求められ、そ

の危険度は毎年少なからず死者が出るほど苛烈である

そして正影は“ある理由”で去年中忍試験を合格できなかった……

理由は簡単、姉のヒカルのせいである

彼女は重度のブラコンであり、試験が近くなると正影に情報工作をアレコレとやり始め、正影に気づかぬようにしていたのだが、正影はそんなことはお見通しで普通に試験を受けた。するとヒカルは思わぬ行動に出る……中忍になると必然的に任務のランクは上がり、任務中の死亡率も必然的に跳ね上がる。そして正影の能力なら受かること恐れたヒカルは最終手段……中忍試験中の最終の日、正影に薬を盛ったのである

勿論これは里の上忍や一部の中忍は知っていて、「ヒカルのブラコンはついにそこまでやらせた」と一時期話題になった（勿論ヒカルは厳重注意を受けた）

「もう姉ちゃんがあそこまでやるなら一生下忍でもいいかなあ……なんて思いましたよ」

まるで仙人のように達観した顔をする正影……

「ほれ」

その姿のあまりの可哀そうな空気にシカクは思わず気を使って、お茶と煎餅をだしてしまったのだった……

だが

「なーんて悲しい感じに仕上げてみましたけど……どうっすかね？」

「は？」

今までの空気が嘘のように霧散した……いや木っ端微塵になった

「まあ去年は確かに試しにと試験を受けましたけど……まさか姉ちゃんがあそこまでやるとは思わなくて困りました」

ケロッとした顔で煎餅を齧る正影……シカクはその図太さにアホ面を晒すのだった……そして気を取り直したシカクは

「まあとにかく中忍試験なんだが……お前はどうするんだ？……お前はヒカルやセンリとの任務を組んで評価もそれなりにあるし……なんだったらその任務の功績で中忍になれるかも知れんぞ？」

そう助言する、が

「いや、中忍試験はしっかりと受けますよ」

正影はいつになく真剣な顔で言った

「任務の功績よりしっかりと試験で結果を残したい……それにシカクさんの息子のシカマルもでるし、ナルトもリーも……俺も一年間みっちり修業したのに俺だけズルするってかっこ悪いですよね」

「……そうか」

シカクは頭をかいて苦笑する……正影も一端の忍者である……そんな事をしなくてもいい程の研鑽を磨いてきた自信はあった筈だ

「すまん……いらないお世話だったな」

「いえ……あの時の姉ちゃんが盛った薬を解析したシカクさんならそれを言われるのも頷けます」

正影とシカクは苦笑し合う……実はヒカルが正影に盛った薬を解毒したのがシカクだったのだ

だからこんな話を正影にシカクはしたのだが……そんなヤバイ薬を盛ったヒカル…恐るべしである

「じゃあ俺はこれで」

その後、シカクと将棋をし、日が陰る頃に正影は帰ろうとする……
将棋の勝敗はシカクの圧勝だったが

「何だもう帰るのか？」

「ええ、Cランクの任務を受けたカカシ班が里に帰るのが遅くてね
……偵察にちょうど非番だった俺が駆り出されることになりまして
……

その準備があるんですよ」

「そうか……“あの”ナルトと“あの”うちはの生き残りがいる班
だ……何か余計なトラブルに巻き込まれてそうだな」

「ええ、俺もそんな気がしますよ」

正影は苦笑して奈良家から出ていく

（今は恐らく木登りの修業でもしてる頃かな）

正影は口に出さず……そんな事を考えながら明日の準備の為に家に帰るのだった

波の国に行く前日のひと時（後書き）

これで波の国編に入ります……波の国編はえらい短いし、正影は全く介入しません

しかし桃地のおっさんと白は原作と違う道を歩みます……どうなるでしょうね

そして姉ちゃんの久々のブラコン発動……そしてヤンデレフラグが立ちました

どうしてこうなったＯＴＬ

死亡……そして紡がれる外伝（前書き）

波の国はこんな感じになりました

しっかし正影はとにかく間に合いませんねえ……その分原作レイプをしないんですけどね

死亡……そして紡がれる外伝

波の国……未だ完成していない大橋の上

「…できるなら……お前と…同じ所に…行きてェなぁ……オレも…」

そう言って…霧の国の鬼人は悲しみと、常に傍にいた者の亡骸を愛しむように死んだ

降ってくる雪……それは鬼人が人として好いた白という少年が降らせた天の涙なのかもしれない…

「…コイツ…雪のたくさん降る村で生まれたんだ……」

涙と鼻水を流してナルトは泣く

それを横にして……鬼人の最後を看取ったナルトの上司であるカカシはポツリと呟いた

「そうか……雪の様に真っ白な少年だったな……」

その名の様に残酷なまでに白い心を持った少年と悪鬼と呼ばれた忍びの狂おしいまでに壊れ、完成していた二人の生き様に

（行けるさ…　再不斬…　二人一緒に…）

カカシの独白は未だ降り止まぬ雪の中、溶けるように消えたのだった……

・・・・・・
・・・・・
・・・・・
・・・
・

それから二週間……

木の葉の忍……はたけカカシ・うずまきナルト・春野サクラ・うちはサスケの四人は波の国に完成した橋の近くの森の一角にあるものを囲んで立っていた

二つの墓…片方には身の丈程の大刀が後ろに刺さり、もう片方には花の髪飾りに生前付けていた衣服の一部が掛けられている

桃地再不斬と白…二人の墓だった

スウ・・・

二人の墓に供えられた餅を取ろうと伸ばされた手……だが

パチィ！

「あ　痛てェ！」

それをすかさず防ぐものが

「アンタ　何意地汚いことしてんの！　バチ当たるわよ！」

「へへ」

キッ！　と物凄い顔でピンクの髪の女の子…サクラはナルトに怒るがナルトは悪戯が見つかった子みたいに頭を掻いて誤魔化した

サクラはそんなナルトに辟易しつつ白の墓の前まで行く

「……でもさァ、カカシ先生…」

「んーーー？」

サクラはカカシに背を向けたままかつて二人の言っていた事を聞いてみた

「…忍者の在り方って、やっぱこの二人が言ってた通りなのかなぁ……」

それは生前二人が言っていた言葉……忍は所詮、道具でしかないという事を

その質問にカカシはサラリと

「忍ってのは自分の存在理由を求めちゃあいけない……ただ国の道具として存在することが大切……それは木の葉でも同じだよ…」

それは組織として……そして常に世界の裏を潜る忍者だからこその悲しい現実だった。それはどんな年齢であれ、等しく忍が請け負う業……それを納得しないもの者が

「本物の忍者になるって、本当にそうゆうことなのかなぁ…なんかさ！　なんかさ！　オレってばそれ、ヤダ！！」

ムーンと唸るように言うナルト。そしてその後ろに立っていたサスケはカカシをチラッと見て

「アンタもそう思うのか？」

その言葉にカカシは苦笑しつつ

「んーーいやな…だから忍者って奴は皆、知らず知らずそのことに悩んで生きてんのさ…」

そしてカカシは二つの墓を交互に見て

「……再不斬や……あの子のようにな…」

それは組織として生きる者が抱える物の一つであり、それの答えは十人十色、個人が抱えるしこりのような物でもある……解は己しか見つけられない

そして佇む四人は無言で墓を見ている……と、ふいに

「よし、今決めたってばよ!!」

ナルトは決意した顔で宣言した

「オレはオレの忍道をいってやる!!」

自らの忍道を貫く……それはナルトが生涯を懸けて目指した言葉だった

「！」

その言葉にカカシは驚き、また少年の成長を感じてにこやかに笑うのだった……

と、四人の背後から声

「……んじゃ、もういいかな？」

その言葉に四人は急いで振り返る……そこには頭に茶色に何故か【プリン】とロゴの入ったバンダナを巻き、首に布で木の葉の額当てをぶら下げた青年が立っている

「ん？……君はたしか…」

カカシはその顔に覚えがあり、名前を言おうとしたとき

「あ～～～～～！！　なんで正影がこんな所にいるんだってばよ！！」

ナルトはビシィ！っと指をその青年に向けたのだった

・・・・・
・・・・・
・・・・・
・・・

・

Ｓｉｄｅ　正影

「へ～、俺達の探索にねぇ…」

「まあ、そうゆうことです…流石に一か月近く連絡もないと里の人間も怪しみますって」

カカシさんに言外に、長期になるなら連らくしろ……と言っておいて、騒ぐ一人と困惑する二人を見た

「これがカカシさんの班ですか……中々面白いメンバーですね」

「まあね、これでも苦労してんだよ」

カカシさんはため息を漏らした

「何言ってんですか…聞いてますよ？カカシ先生の遅刻が酷くて困るって……主にナルトから」

カカシさんは苦笑して冷や汗を流す…ナルトの方はサクラとサスケに俺の説明をしているようだ

「やい正影！　聞いてんのかってばよ！？」

「なんだよナルト、俺は今カカシさんとＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩ中だ」

「え？　カカシ先生と知り合いなんですか？」

そして俺の言葉にピンク髪の少女である春野サクラが食いついた

「ああ、まあね…何回か仕事したことあるよ」

「「え…一緒に仕事！？」」

カカシさんのそのセリフにナルトとサクラが同時に驚く……向こうにいるサスケも興味あるような顔をしている

「お前らを請け負う前、こいつとこいつの姉、そしてもう一人のくのいちで一時期四人小隊（フォーマンセル）を組んだ時期があったんだよ」

「そうそう、あん時はカカシさんの遅刻癖にブチ切れた姉ちゃんがカカシさんを殺しかけて大変だったなあ」

「ああ、大変だった……」

俺とカカシさんは遠い目をしている……三人は何か聞いちゃいけない事だと悟り、深くは突っ込まなかった

「まあそんな事はおいといて此方は既に里に報告を済ませましたから……橋の方で皆が待ってるよ」

「皆って…イナリ達か！」

ナルトは嬉々とした表情であの大橋に向かっていく、それにサクラは苦笑…サスケはナルトの行動に鼻で笑いながら二人について行った

「中々仲のいいチームじゃないですかカカシさん」

「まあね、でも問題児二人抱えると頭が痛いよ」

「うちはにナルト……まあ水に油でもんね」

お互いに苦笑し、カカシさんは先に三人の所に向かった……今墓の前に居るのは自分だけ……

そろそろやるかい？

「来い、八百万」

その言葉に体に封印された斬魄刀…八百万が顕現する

どうやら八百万は常時開放型らしくかつての形から変わり、今は小太刀程度の反りの全くない忍者刀に変わっている

「招け、八百万」

その言葉と共に八百万の形が変化する

斬魄刀・八百万……その力は形なき物に力を与え、従わせる妖刀

八百万に力……霊力が集まった時

ボウ……

俺の目の前に二人の忍者が半透明となって浮いていた……

そうなんだよ……この刀…死者を幽霊として呼びよせて従わせることが出来るんだよ

それ以外にも動物霊や不幽霊、自縛霊も呼び寄せることが可能……さらにその霊体を加工、物質化して操ることも可能なんだ

「おはようございますお二人さん」

俺の言葉に薄らと目が覚めた二人は困惑した表情になった

「俺は……死んだはずじゃなかったのか?」

「僕もあの上忍に胸を貫かれた筈なのに…」

「いや、死んだよ……霧隠れんの鬼人とその従者よ」

そして今幽霊となって漂っている二人……再不斬と白に状況の説明を始めるのだった

5分後…

「つまりそのお前の小太刀の力で俺達はこうして幽霊となって生まれたって事なのか？」

「そうゆうこと」

「アホみたいな話……とは言えねえなあ」

そういって再不斬は後ろにある墓に立てられた大刀・首切り包丁を見て呟いている

まあ無理もないか……死んだ筈の自分がこうやって幽霊になるなんて思わなかった筈だ…干渉に浸る前に本題にいかないと

「まあなんで俺がわざわざ二人を呼んだというと訳があるんだ……」

二人は俺に向き直った……さあて…これは原作にはなかったストーリーだ……イレギュラーに対抗するためのイレギュラー……手札は出来るだけ伏せさせてもらうよ

俺はこうして二人の協力者を得ることになったのだった……

「ちなみに白…お前が希望するなら性別を変えてやる」

「是非、お願いします」

「なっ！？　何を言ってやがる！」

おお、焦る再不斬なんて珍しいもん見た……しかし愛はついに性別という垣根を越えたな……幽霊同士だけど……

死亡……そして紡がれる外伝（後書き）

どうしてこうなったＯＴＬ

そして姉ちゃんはどんどん凶暴化していく……

まじでどうしようかな？

そして再不斬と白のラブラブフラグが立ちましたと

修行は辛い・苦しい・モゲロ（前書き）

遅くなりました。久々の更新です

修行は辛い・苦しい・モゲロ

木の葉の森から更に奥、今回の中忍試験が行われる死の森から更に外れた場所にとある修練場、そこは一つの巨大な結界忍術が施されており、火遁・水遁・土遁・風遁・雷遁等の大規模な忍術が耐えられるように設計された特別仕様である

そしてその修練場では地獄が展開されていた

「どうした？……死ぬにはまだ早いぞ正影？」

シュシュ！！　ブウン！

「バカ野郎！！　まだ早いってお前が俺にそのあの世の片道切符を札束のばら撒いてんだろうが！」

現在その地獄を体験中のハゲの男…東雲正影と

「だったらさっさとお前がオレを何とかするしかないな！」

正に悪鬼羅刹の如く身の丈程の大刀を振り回す再不斬の姿があった

……しかも再不斬は水分身で百人となって

正影は豪雨の如く襲いかかる大刀の斬撃を正に針穴を通すかのように刃のいかない場所に体を滑りこませ、忍具口寄せで呼び出したクナイやら手裏剣やらを視界に写る再不斬達に投げつける。ご丁寧に全て急所に向かって

そして再不斬の分身たちはその忍具攻撃に三分の一が水に変わる…
…残りは上手く忍具を大刀などで弾いて回避していた

「甘いな…水分身の術！」

するとすかさず水分身で人数を補充する再不斬

「お前俺のチャクラだからって容赦ないね！」

正影は印を組んで再不斬の一団に真っ黒い煙を吐いた…そしてそれはほぼ全ての再不斬を覆い隠す

「「「「「「「「「「オレに眼潰しは効かないと言ったはずだが？」」」」」」」」」」

百人の再不斬が呆れた声を上げるが正影はニヤリと笑うと

「ちげーよ」　カチッ！

火遁・灰積焼

左手の斬魄刀と右手にあるこの火遁を教えてくれた“ある上忍”から貰ったメリケンサックとナイフを一体化したような武器の［アイアンナックル］を打ち合わせて火花を散らすと

ボオオオゴオオオォォォォォォォォンンンンン！！！！！！！

辺り一面に大爆発が起こった……そして

「ぬわああーーーー！！！！」

ついでに正影も巻き込まれた……

・・・・・

・・・・・

・　・　・
・　・
・

「全く……自分の術に巻き込まれるとか三流以下だな」

「返す言葉もない…」

二人の限りなく実践に近い鍛錬も正影の調節を誤った火遁の影響によって辺り一面が黒こげになり、二人は取りあえずこの惨状を放置して休憩することにした

「お前はとにかくチャクラがバカみたいにあるがその分コントロールも完ぺきにしないと今日みたいな事になる」

「ふんふん」

「だから最優先はチャクラのコントロールに主眼を置きたいが…お前あの火遁今日初めてあんなチャクラ量で試したろ?」

ギクッ!

傍目にはわかりにくいがほんの僅か肩の跳ねた正影に再不斬はため息を漏らした

「まあ今のオレは特殊だからああゆう物理攻撃は気にならないがお前と修業する生身の人間が心配だよ」

やれやれと肩を竦ませる彼…そこにはかつて霧隠れの鬼人と呼ばれた面影はなかった、だが何故正影は再不斬と白を蘇らせ、あまつさえ修業を見て貰っているかというと正影はとある再不斬の可能性に興味を持ったからである

それは彼の忍の育成力……幼少時からとはいえあの時期のサスケやナルトを上回る能力を白に教え込んだその能力に着目した正影は何とかして自分の修業相手になって貰えないかと考えていた

最悪は二人の死亡を偽造しようかと考えていたが斬魄刀の能力に気づいたときにとある名案が思い付いた

“死んだ後に幽霊として修業に手伝って貰おう”と

実際二人は霧隠れの抜け忍…一介の下忍である自分には匿うにも限界がある

ならば実際に死んだ後に協力してもらえばいい…何だかんだ白という未練もあるし二人とも幽霊にすれば案外いけんじゃね？…という次第でやったのだ

そしてその思惑は上手くいき、正影は再不斬を師匠にして現在絶賛修業中である

そしてこの二人…何処となく馬が合うのか関係は良好といえた……しかし問題が一つ出来てしまった

「再不斬さん正影さん…お弁当持ってきましたよ」

「あ、ああ…」

「白、いつも悪いな」

それはこの目の前の少年…いや少年だったが少女に変身した白が原因である

白は幽霊の時正影に性別を返還してもらい、そのまま大蛇丸の使った口寄せ・穢土転生の改良型…人の贄を使わずに塵芥と術式の書かれた式札で体を定着してもらっている

だが女になった弊害か…仕草や体つきが随分と女らしくなっていき……あのナルトがサクラちゃんより可愛いといわしめた頃よりも更に可愛くなっていた

ちなみに再不斬もそれで体を定着しているがそれが問題になっている…その理由とは

「はい、再不斬さんあーん」

「む…」

このイチャつく桃色空間が正影には地獄の罰ゲームのようだった

「おい白…頼むから俺の居ないところでやってくれ」

口から砂を吐きそうな勢いで呟く正影……白はともかく再不斬も眉毛があると（ナルトの気にしていたのかもしれない）とてもイケメンな為にとってもお似合いなカップルなのだが……見せられる方にしたらたまったものではない

「そうだ白…下らないことやってないで「じゃあ正影さん、あーん」いや、オレが食う」

再不残はＴＵＮＤＥＲＥを発動した

「じゃあ再不斬さん、あーん」

「・・・・・・俺向こうで顔洗ってくるわ」

正影はその場に一粒の心の汗を流していった

修行は辛い・苦しい・モゲロ（後書き）

再不斬のツンデレがやってきました・・・何気に独占欲高そうです

そして微妙な伏線……といっても大したもんじゃありません

新たなる出会い（前書き）

ここから中忍試験編に入ります

新たなる出会い

Ｓｉｄｅ　正影

「う、ふあー……」

窓から降り注ぐ日差しに目を瞬かせ、ゆっくりと俺は体を起こした

この頃は修業三昧のせいかぐっすり眠れる為、朝は気持ちよく起きれる…体も軽いしな

眠気眼で部屋から出てきた俺は冷蔵庫にあったベーコンと卵を取り出してキッチンに向かった

まず、フライパンに油をひいて熱し、ベーコンをフライパンに適当に並べて焼いていく

焦げない位に火を調節してカリカリに焼いたベーコンの上に卵を割っていれ、そのまま軽くグシャグシャにする。俺は卵は目玉焼きにしない派なのだ

塩コショウで味付けし、皿にのせたらベーコンエッグの完成……それをテーブルに持ってきてテーブルに置いてあった食パンの上に乗せてがっついた

全部食べ終わり、最後にリンゴジュースで胃に流し込めば準備完了……身支度を済ませてそのまま家に鍵をかけて外に出て行った

今日は特に予定も何もない……修業も一段落ついたし任務もそれなりにこなしている……描写がないからといってサボっているわけじゃないぞ？

ふらふら歩いていると里の入口に見知った顔が立っている……ありゃナルトにサクラにサスケか？

「よーうお前ら、何だ？　任務でもあんのか？」

「あ、正影！」

「こ、こんにちわ」

「……」

サスケは反応なしね……

「あれ？　カカシさんは？」

「「「……」」」

なるほど……いつもの遅刻ね

「まああの人も結構ズボラな所あるから…そのうち来るだろ？」

「もう一時間まってるってばよ…」

「あ、そう…」

うわ、三人がなんかドヨーンとしてる

「まあ気長に待つしかないな、じゃあ俺はこれで」

暇を持て余す三人に適当に言葉をかけて俺はその場を後にした

そして昼も過ぎた頃……

「はあ……もう今日は駄目だ、これ以上はやらんぞ！」

「なんでい、もうへばったのか？」

「いっくら将棋が面白いとはいえずっと負けてたら心が折れるわ！」

暇なもんで奈良家に遊びに来たんだけどシカクさんのせいでドッと疲れたよ…主に心が

今日だけで２０連敗とかやってられんわ

「腹減ったし俺は帰りますよ」

「ん？　家で食ってかないのか？」

「流石にそこまで厄介になるのもね」

そう言って奈良家を後俺はにした。　今日は久々に一楽で食べるかな？

ん？…里の入口から誰か来るな…ありゃカカシ班か？

良く見るとナルトだけ（・・）ボロボロでサクラに肩を借りて貰ってる…ナルトの奴ダセーな

遠目で何言ってるかわからないがナルトとサスケが言い合いして、今度はサクラがサスケになんか言ってる…あ、サクラがなんかショック受けてるな

とりあえず俺はナルト達の所に向かうと

「そんな真四角で適度な穴が２つ開いてる岩があるかァ！！　バレバレだっつーの！！」

確かにありゃバレバレだ……って木の葉丸達か

「さすがオレの見込んだ男！　オレのライバルなんだなコレ！！」

なんか取り巻きが付いてるんだけど……つうかあの小生意気な感じ……

「お～よしよし、面白い坊主だな」

「な、なにすんだコレ！」

いや、頭撫でてるだけだけど？

「あ、正影じゃん。何の用だってばよ」

「いや、なんか生意気そうな坊主が見えたんでな…ついつい構いたくなっちゃって」

「もう頭から手を離せってばコレ！」

「あー悪い悪い」

とりあえず木の葉丸の頭から手をどける

「つうかお前誰だコレ」

「俺？　俺は正影ってんだ、覚えとけ木の葉丸」

俺がそうゆうと木の葉丸は驚いた顔して

「な、なんで俺の名前を知ってるんだコレ」

「ああ、ナルトから聞いたことあんだよ。お色気の術を伝授した坊主の話をな」

その言葉に納得する木の葉丸

「つうかもうちょっと上手く隠れような木の葉丸」

「う、うるさいぞコレ！」

途端に顔を赤くする木の葉丸を見て俺はニヤニヤする

すると今度は木の葉丸が放心していたサクラの事をナルトに聞いている

っておい、デコとかブスとかそんなこと

「「「「ぎゃあああああ！！！！」」」」

いわんこっちゃない…ナルトと木の葉丸の仲間達が憤怒の表情のサクラに追いかけられると

ドカッ！！

「いてっ！」

誰かにぶつかる木の葉丸

「いてーじゃん…」

ん？　あの黒子みたいな奴と背中にでっかい扇子を持った女の子は……

すると黒子の奴が木の葉丸の胸倉をつかんで持ち上げる

ありゃ……カンクロウとテマリか？

こうして俺はついに砂の忍と対面するのだった

新たなる出会い（後書き）

話が上手くまとまらないので話を分けたいと思います

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6576n/

心に刃を持てる者

2011年3月10日11時30分発行